

新羅・真平王代後期の対倭外交

—真平王の対倭政策と関連して—

近 藤 浩 一

要 旨

本稿は、『日本書紀』にみられる新羅の真平王代後期に展開された対倭外交について、既往の研究と異なり新羅史の観点から検討した。これを通して、真平王代後期の対倭外交は、従来の指摘のように百済・高句麗との対立から倭の支援を引き出そうとした従属的な態度で始まったのではなく、対隋・唐外交の進展と国内の官制整備を達成した自信をバックに、積極的な外交政策のもと実行されたことを明らかにした。

真平王代（579～632）に展開された対倭外交の特徴をみれば、真平王は在位後半に至るまで倭に対しほとんど外交活動を実施しなかったが、真平王32年（610）を契機に態度を大きく変化させた。これ以後、真平王は立て続けに使者を派遣し倭と活発な外交活動を推進している。

こうした背景としては、即位直後から着手した真平王の国内外政策の成功が原動力となったと考えられる。真平王は、国内の官制整備が一段落する真平王16年（594）に、隋に使者を派遣して対中国外交を始動した。さらに唐が建国されると、領客典を設置するなどその動きを一層加速化させている。こうした関係をもとに高句麗・百済に対抗できるまでの外交能力を獲得したが、真平王はそれらをもとに一層王権強化を実現し、後期には対外意識が大きな高まりをみせたのである。

それゆえ、当該期の対倭外交は、積極的な外交政策のもと展開したとみられる。新羅側の新たな動向は、日本側の記録であるが『日本書紀』の内容にみられる通りであり、まず真平王代後期から倭に多くの仏教文物を送り始めている。特に真平王44年（622）は、新羅使節が仏像及び仏舎利・幡など多くの仏具を持参する様子が鮮明に確かめられる。さらにこのときは、百済や高句麗の僧侶たちが集まる飛鳥寺に代わり四天王寺が新たに登場し、新羅が送った仏舎利などの仏教文物はそこに施入されている。

この要因を考える上では、真平王代の新羅国内での仏教の役割が注目される。新羅では、前代の真興王以降国王を転輪聖王・釈迦仏に比定し貴族を弥勒菩薩とすることで、王権と貴族勢力が一定の秩序を形成していた。新羅仏教は王権を象徴する思想的基盤であったといえ、新羅が貢納した仏像・仏具も同じく新羅王権の象徴物であったことが窺い知られる。したがって真平王は、このような仏教文物を倭に送り新羅の王即仏思想を伝えることで、倭王を真平王の仏国土に引き込もうとしたと考えられる。

さらに同じ622年には、新羅使節が新羅経由で在唐倭人留学生を倭に送り届けている。この時から新羅と倭の間では、留学生を通じた外交関係が真平王に続く善徳王代まで継承されたのである。こうした留学生は、帰国直後に新たな外交政策を提言した恵日らの言動からわかるように、倭の外交活動に直接影響を及ぼす存在であった。真平王は、622年を契機に在唐倭人留学生とも関係を築きながら、倭に新羅の思想・制度などを伝播させようとし、それらを通じて倭国内でいわゆる「新羅化」を模索した可能性までが推察される。

キーワード：真平王，対倭外交，『日本書紀』，仏教文物，在唐倭人留学生

はじめに

古代朝鮮において高句麗や百済に遅れて発展した新羅は、6世紀中葉の真興王代（在位540～576）に漢山城一帯（現在のソウル地域）や加耶諸国を占領することで領土拡張に成功し、676年の統一期まで半島内の中心的存在となった。真興王の次の真智王の時代は短命に終わったが、その後に即位した真平王は、54年（579～632）という長期間在位した。真平王代は、政治・外交・思想など各方面にわたり専制的王権の様相を現す時期であって¹⁾、新羅王権の基盤といえる中央官制の整備が促進され飛躍的に国力を高めている。とはいえその一方で、隋・唐の建国とそれに合わせた百済・高句麗の動向の活発化により、朝鮮半島情勢は緊迫した様相を呈していた。

そのため真平王は、対外的な環境に対処すべく確固たる対外政策に従事する必要性に迫られたのであった。それは、必然的に対倭外交にも多大な影響を与えたに相違ない。例えば『日本書紀』によれば、真平王は在位前半期には倭とほとんど外交関係を持たなかったが、同王32年（610）以後は続けて使節を派遣している。何より推古29年（621）と31年（後述のように実際の年は推古30（622）である）条の記録は、真平王の倭に対する新羅外交の変化を具体的に示すものと考えられる。

こうしたことから、真平王代（6世紀後半～7世紀前半）の新羅と倭の関係史を扱った論稿は比較的多い²⁾。しかしながらこれらの多くは、倭国（日本古代史）の立場から研究されたものである。ゆえに、研究対象も倭王権側にとどまるものであった³⁾。既往の研究では、真平王代後半から本格的に行われた対倭外交について、新羅の国内外情勢の不安定要因と結びつけて評価されるのみで⁴⁾、新羅側の立場から真平王が推進した積極的な側面には注目されなかったといえる。

そこで本稿では、概要は知られつつも新羅史の側面から検討されることの少なかった、真平王代後期の対倭外交を検討してみたい⁵⁾。まず、真平王代の対倭外交関連記録はもとより、百済と高句麗の対倭外交の動向を整理する。そして、当代の新羅において積極的に推進した対中国外交の影響が、対倭外交の展開にいかに関与したのかをみる。

次にこれらを踏まえ、倭の立場で記述されているため史料の信憑性には留意しながら、『日本書紀』に記録する真平王代後期に展開された対倭外交の具体像を検討する。特に、新羅が仏像と様々な仏具を送りそれが秦寺と四天王寺に施入されたことに加え、この時初めて在唐倭人留学生を倭に送り届けた事実に注目したい。以上を通して、真平王代の後半に対倭外交が本格的に始動された新羅側の事情、対倭政策に迫ってみたい。

1. 真平王代の対倭外交とその特徴

はじめに新羅の真平王代にみる対倭外交の推移を概観したいが、当代の対倭外交記事を整理すれば次のようである。

表1 真平王代の対倭外交記事

西暦	新羅	倭	外交内容	対象
579.10	真平王 元	敏達 8	調と一緒に仏像を送る。	新羅→倭
580.6	真平王 2	敏達 9	調を送る。	新羅→倭
582.10	真平王 4	敏達 11	調を送る。	新羅→倭
584.2	真平王 6	敏達 13	難波吉士木蓮子を新羅に派遣。	倭→新羅
591.11	真平王 13	崇峻 4	吉士金を新羅に派遣。新羅出兵準備の記事。	倭→新羅
597.11	真平王 19	推古 5	難波吉士磐金を新羅に派遣。	倭→新羅
598.4	真平王 20	推古 6	難波吉士磐金の帰国、鵲2隻を倭にもたす。	(倭→新羅)
598.8	真平王 20	推古 6	孔雀2隻を送る。	新羅→倭
600	真平王 22	推古 8	新羅出兵記事。難波吉師神を新羅に派遣。新羅・任那の使が調を送る。	倭⇄新羅
602.2	真平王 24	推古 10	新羅出兵準備の記事。	倭→新羅
603.4	真平王 25	推古 11	新羅出兵準備の記事。	倭→新羅
610.7	真平王 32	推古 18	新羅・任那の使人が筑紫に到着。10月には王京で外交儀礼が行われる。	新羅→倭
611.8	真平王 33	推古 19	新羅使人と任那使人が共に朝貢。	新羅→倭
616.7	真平王 38	推古 24	奈末竹世士を派遣して仏像を送る。	新羅→倭
621	真平王 43	推古 29	奈末伊弥買を派遣して朝貢。表書を携帯し送る。	新羅→倭
622.7 (623)	真平王 44 (45)	推古 30 (31)	新羅が大使奈末智洗爾、任那が達率奈末智を派遣して朝貢。仏像一具及び金塔・仏舍利などの仏具を送る。また在唐倭人留学生を送り届ける。	新羅→倭
622.11 (623)	真平王 44 (45)	推古 30 (31)	新羅出兵記事。新羅・任那の使人が朝貢し調を送る。	倭⇄新羅

上の表1によれば、真平王の在位年である579～632年間の新羅は、積極的な対倭外交を推進したわけではなかったとみられる。このことは、その実態が疑問視されている「任那の調」貢納記事⁶⁾を除くならば、一層明らかであろう。とはいえ、『日本書紀』の記録によれば、真平王は579年の即位とともに倭に仏像などを数回贈り、対倭外交を模索したことが窺われる。こうした即位年に仏像を送るような行為は、当代の百済への対抗心並びに仏教を深く帰依した前王の真興王の意思を継承した態度であったのかもしれない⁷⁾。

しかしながら、以後こうした羅倭関係が続くことはなかった。表1から明瞭な通り、前述の600年の「任那の調」⁸⁾や鵲・孔雀などわずかの贈物関係を除けば、真平王は同王4年(582)

以後32年(610)までの長期間倭との外交を中断しており、仏教を通じた交流はもとより使節派遣の記録はまったくみられない。この理由について既往の研究では、この時期、特に倭が隋に使節を派遣し始める600年前後を境に、新羅と倭の関係が極めて悪化したからと理解されている⁹⁾。このような見解の多くは、倭が真平王13年(591)及び24年(602)・25年(603)に新羅出兵を準備し、22年(600)には新羅に出兵したとする『日本書紀』の記録にもとづいている。ところが、倭の軍隊が新羅に出兵した記録は、『三国史記』にはまったく存在しない。このような倭の新羅出兵記録は、任那関連記事と同様に『日本書紀』編纂段階に作成された可能性も指摘できるのである¹⁰⁾。

とすれば、この時期に新羅と倭の関係が悪化していたことを証明する史料の根拠はなくなる。すなわち、新羅の倭への使節派遣が停滞した要因は、羅倭間の外交が葛藤状態に陥ったこととは関係がなさそうである。したがって、当時新羅が倭に使節を頻繁に派遣しなかった理由は他の部分によると考えられるが、それは真平王代の国内政治との関係が強く想起される。使節派遣の決定は、倭政府の動き並びに新羅を取り巻く国際情勢に合わせてなされることはあったろうが、新羅王権の意思によるところが大きかったのである。

このように考えれば、真平王の在位前半期には、新羅政府内においていまだ倭との外交関係を重要視していなかったともみてとれる。既往の新羅内政を扱った研究でも、真平王代前半は外交よりも官制整備を核とした内政改革に従事し、それを通じた王権強化が最優先課題であったことが指摘されている¹¹⁾。新羅において王権強化と直接関係する中央行政官府(署)の整備は、概ね真平王代に入り実施されているが¹²⁾、真平王代の前期(同王13年以前)と後期(同王43年以後)に関連記録が集中する。特に真平王代前期は、同王3年(581)に人事を担当する位和府(のちの吏部)を設置したのをはじめ、5年(583)に船府署、6年(584)に国家の貢賦を担う調府と乗府、8年(586)には礼部を各々設置している¹³⁾。

この中には、船府署・礼部など外交政策と関連した部署が含まれており、『三国史記』には、真平王43年(621)以前に対倭外交を担当したことを知らせる倭典の存在も確かめられる¹⁴⁾。とはいえこうした僅かの例を除けば、真平王代前期の官制整備の目的は、内政改革を通じた王権強化にあったことが窺い知られる。次章で詳述するが、真平王代に新羅が本格的な外交を模索する時期は、内政整備を達成した後からであった。さらに先走って言えば、真平王代は、内政改革の進展が外交政策に多くの影響を及ぼしたが、その成果を受けてまずは対中国(隋・唐)外交により朝鮮半島情勢を打開しようとしたのであった。

ところで、真平王代の前・中期に倭に対し頻繁に使節を派遣した国は、周知のように百済と高句麗であった。両国は、特に仏教文物を媒介に活発な外交を展開していた。当時の仏教は、宗教にとどまらず様々な分野にその役割を果たすとみられるが¹⁵⁾、『日本書紀』にみられる552年倭の仏教公伝から7世紀前半の新羅真平王代までの、朝鮮三国から倭に送られた僧侶や仏像・仏具など仏教文物について整理してみれば、次の表2のようである。

表2 倭国に送られた仏教文物・僧侶（552年〈倭の仏教公伝〉～真平王代）

西暦	新羅	倭	出発地	仏像	仏具	僧侶	その他
552.10	真興王 13	欽明 13	百済	金銅像	幡蓋・経論		
554.2	真興王 15	欽明 15	百済			曇惠など9人 (道深等7人と 交替)	易博士・暦博 士・医博士・採 薬師・楽人など
577.9	真智王 2	敏達 6	百済		経論	律師・禅師・比 丘尼	呪禁師・造仏 工・造寺工
579.10	真平王 元	敏達 8	新羅	仏像			
584.9	真平王 6	敏達 13	百済	弥勒石 像・仏像			
588	真平王 10	崇峻即位 前紀	倭→百済				三尼が百済での 受戒を請う→崇 峻3年帰国
588	真平王 10	崇峻 元	百済		仏舎利	惠総・令斤・惠 寔・聆照律師・ 令威・惠衆・惠 宿・道嚴・令開 ら	寺工・鍮盤博 士・瓦博士・画 工、調など
595	真平王 17	推古 3	百済			惠総（既戸皇子 の師）	
595.5	真平王 17	推古 3	高句麗			惠慈（既戸皇子 の師）	
599.9	真平王 21	推古 7	百済				駱駝・驢・羊・ 白雉
602.10	真平王 24	推古 10	百済			観勒	暦本・天文地理 書・遁甲方術書
602.閏10	真平王 24	推古 10	高句麗			僧隆・雲聡	
605.4	真平王 27	推古 13	高句麗				飛鳥寺の造像の ために黄金300 両を献上
609.4	真平王 31	推古 17	百済（漂 着）			道斤・惠弥	
610.3	真平王 32	推古 18	高句麗			曇徴・法定	五経・彩色（絵 具）・紙・墨
612	真平王 34	推古 20	百済（漂 着）				須弥山及び呉橋 の工人・伎楽師
616.7	真平王 38	推古 24	新羅	仏像			
618.8	真平王 40	推古 26	高句麗				方物
622.7 (623)	真平王 44 (45)	推古 30 (31)	新羅	仏像	仏舎利・金 塔・観頂幡 など		
623.1 (624)	真平王 45 (46)	推古 31 (32)	高句麗			惠灌	

特に百済は、早くから仏教に関わる文物・人材を倭に多数送っていたことが垣間見られる¹⁶⁾。また高句麗も、6世紀末から7世紀前半にかけて集中的に僧侶を派遣し、飛鳥寺の造仏¹⁷⁾の際には黄金を送るなど活発な動きをみせていた。このようにみれば、真平王代前・中期にあたる7世紀前後の新羅と百済・高句麗の間では、対倭政策の立場に相当違いがあったと考えられる。すなわち、新羅が倭との外交を選択しなかった反面、百済と高句麗は絶えず倭に僧侶を派遣するなど積極的な外交を展開していたのである。なかでも、倭王権内で最も中心的立場にあった厩戸皇子（聖徳太子）の師が高句麗僧の恵慈や百済僧の恵聡であったことからわかる。また、彼らは当時の倭王権の象徴的な場所であった飛鳥寺に集められていたが、飛鳥寺は6世紀末から7世紀初に百済と高句麗の援助により創建されていた¹⁸⁾。そこは推古大王の時代（593～628）には、倭王権の重要な政策決定の場であり、外国から来た使節の外交儀礼の場所としても機能していたとされる¹⁹⁾。言うならば飛鳥寺は、高句麗や百済王権の意向により派遣された、表2にみられる恵慈や恵聡をはじめ観勒（百済）・曇徴（高句麗）など数多くの僧侶と先進文化の担い手が往来し、それらの利害調整の場であったのである²⁰⁾。

飛鳥寺をとりまく渡来僧と外交については、例えば李成市氏が、上の恵慈の活動に注目しながら高句麗嬰陽王代の対倭外交の新たな側面を論じている。李氏の見解によれば、607年の倭の遣隋使一行が携帯した国書は恵慈が作成した可能性が高く、倭の対隋外交に高句麗の意志が何らかのかたちで反映されていたという²¹⁾。『三国史記』によれば、高句麗は603年（真平王25）より新羅への攻撃を本格化させていて、この頃の高句麗による対倭外交と新羅侵攻の関連性は想起できる²²⁾。ただし、恵慈などの活動が倭の対新羅強硬路線を助長させたと考えられることには、前述の通り慎重であるべきである。ともあれ百済と高句麗の両国は、倭に対し仏教を媒介に頻繁に使節を派遣しながら接近していたといえる。

さて、倭との積極的な外交関係を選択しなかった新羅の真平王も、在位後半には対倭外交を模索してきている。具体的には、表1のように610年（真平王32、推古18）の新羅使人沙喙部奈末竹世士の派遣に始まる。逆に倭の立場から、この時倭に派遣された新羅使節が宮都に案内されてそこで外交儀礼を受けているのをみると、倭王権の新羅への新しい外交路線もみとれるようである²³⁾。こうした事実から、610年を契機に真平王は、対倭外交の様相を変化させていたことが読み取れる²⁴⁾。そこで改めて、610年以後の真平王代に活発に推進された対倭外交の具体像を示す史料をあげて検討したい。

【史料】

①秋七月、新羅使人沙喙部奈末竹世士、与任那使人喙部大舍首智買、到于筑紫。九月、遣使召新羅任那使人。冬十月己丑朔丙申、新羅任那使人臻於京。是日、命額田部連比羅夫、為迎新羅客馬之長。以膳臣大伴為迎任那客莊馬之長。即安置阿斗河辺館。丁酉、客等拜朝庭。於是、命秦造河勝土部連菟、為新羅導者。（中略）乙巳、饗使人等於朝。以河内漢直

贄為新羅共食者。錦織首久僧為任那共食者。辛亥，客等礼畢，以歸焉。〔『日本書紀』推古18年（610）秋7月条〕

②秋八月，新羅遣沙喙部奈末北叱智，任那遣習部大舎親智周智，共朝貢。〔『日本書紀』推古19年（611）秋8月条〕

③秋七月，新羅遣奈末竹世士，貢仏像。〔『日本書紀』推古24年（616）秋7月条〕

④是歳，新羅遣奈末伊弥買朝貢。仍以表書奏使旨。凡新羅上表，蓋始起于此時歟。〔『日本書紀』推古29年（621）是歳条〕

⑤卅一年秋七月，新羅遣大使奈末智洗爾，任那遣達率奈末智，並來朝。仍貢仏像一具及金塔仏舎利，且大観頂幡一具小幡十二条。即仏像居於葛野秦寺。以余舎利金塔観頂幡等，皆納于四天王寺。是時，大唐學問者僧惠齊恵光及医恵日福因等，並從智洗爾等來之。於是，恵日等共奏聞曰，留于唐國學者，皆學以成業。応喚。且其大唐國者，法式備定之珍國也。常須達。〔『日本書紀』推古31年（實際の年は推古30〈622〉）秋7月条〕

まず史料③によれば，真平王は同王38年（616）に奈末竹世士を倭に派遣し，仏像を共に送っている。新羅は，この時まで仏教文物を媒介に倭との外交を展開しなかったが，610年代に入り百済や高句麗と同様な方向に活動を変化させたのであった。新羅は仏教を中心に文化交流を通じて倭との外交関係を展開し始めたのだが，これを一層明確に示すのが史料④と⑤である。なお⑤の推古31年（623）秋7月条は，本条文の研究当初より井上光貞氏などが，諸本では推古31年とするが現存最古の写本である岩崎本では推古30年とすることを明らかにしている²⁵⁾。⑤の実際の年は推古30年（真平王44，622）であるので，以下でも⑤の記録はこのように記したい。さらに，『日本書紀』推古31年～33年条は，実際には30年～32年条にあたることも立証されている。ともあれ，④・⑤の両史料の概要を下に整理してみたい。

【史料④・⑤の概要】

(1) 新羅使節の奈末伊弥買が表書を持参して来た。新羅が倭に文書を送ったのはこの時が最初であった。

(2) 新羅大使の奈末智洗爾と任那達率奈末智が来朝したが，この時，仏像一具と金塔・舎利・大観頂幡一具・小幡十二条を貢納してきた。

(3) 上の(2)の仏像は葛野秦寺に施入され，仏舎利・金塔・観頂幡などの仏具は四天王寺に施入された。

(4) (2)の新羅使節とともに在唐倭人留学生（大唐学問者の僧惠齊・恵光，医恵日・福因ら）が唐から新羅を経由して倭に帰国した。

(5) 新羅使節が送り届けた留学生の恵日らは，帰国直後から国際情勢を踏まえて法式が整備された唐国との往来を建言した。

このように(1)から(5)までの内容は、真平王が展開した対倭外交の様相にとどまらず、同王後期の新たな対倭意識を具体的に伝えている。繰り返しになるが、616年に続き622年(真平王44)に仏像をはじめ様々な仏教文物を倭に送っている意義は、当時の新羅の新外交路線を象徴する出来事であって決して低くないと考えられる。さらに興味深い事実は、この時の新羅使節は唐に留学していた倭人までを新羅経由で倭に送り届けている。

以上、616年から新羅は倭に対して、仏教文物と在唐倭人留学生を通じた文化交渉を推進したといえる。ただし一層詳細にみれば、これは百済と高句麗に対抗する形で実施されたのであるが、直接僧侶を倭王権内部に派遣しなかった点は、百済・高句麗両国と様相を異にしていた。この点こそが、新羅王権が模索した真平王代後半の対倭外交の最大の特徴ともいえる。さらに言えば、このような真平王の対倭外交は、前述のように官制整備を通じて王権強化を達成した以後に推進されたものであった。そのため、倭に対する外交態度もいくらか強硬な姿勢で臨んだとも予測され、上の史料にみる真平王代の対倭外交の特徴は、既往の研究と一層異なる視点からの再検討が不可欠と思われる。

2. 対隋・唐外交の影響と対外政策の変化

真平王が在位後半から対倭外交を推進した外交的背景には、何より对中国(隋・唐)外交の成功が想定される²⁶⁾。上の史料④-概要(1)や史料⑤-(4)にみられる、新羅使節が表書を持参したり、在唐倭人留学生を送り届ける行為は、その一端を垣間見させてくれる。特に、その記録によると新羅使節が倭に文書を持参したのはこれが最初のものであるが、こうした文書を介した外交形態は、真平王代の对中国外交が倭にまで及ぼした影響の一面であるともみられる²⁷⁾。そのため、真平王が対倭外交を推進した背景をより深く理解するためには、真平王代の对中国外交に改めて注目する必要があるだろう。

真平王の対外活動は、同王16年の594年に初めて隋に使節を派遣することで本格的に始動された。以後真平王は、同王35年(613)まで8回もの使節を派遣し、1度の来使を受けていた²⁸⁾。しかしながら、高句麗と百済が581年(真平王3)から使節を隋に派遣したて続けに朝貢を行っていたことと比べれば、新羅は相当遅れて対隋外交を展開したようである²⁹⁾。

それならば、新羅の対隋外交の開始が両国より遅れた理由はいかなる事情によるだろう。前述の通り、真平王在位前半は内政整備に重点が置かれていた。当代を専門的に研究した李晶淑氏の指摘によれば、『南山新城碑』が築城された真平王13年(591)をかわきりに、新羅王権は国政への自信を獲得したと指摘されている³⁰⁾。すなわち、真平王が対隋外交を始動した594年は、国内の官制がひとまず完成し、対外政策に集中的に従事できる時期であった。

以後新羅は、隋・唐との外交を通して、高句麗・百済に対抗できる外交能力の獲得をめざしている。ただし、その外交政策の中心は請兵外交であった³¹⁾。『三国史記』からも、真平王30

年（608）・33年（611）に高句麗が新羅の領土を侵略すると、これをすぐに隋に伝えて兵を請うている様子が窺い知られる³²⁾。この時、真平王がいかなる形式により対中国外交を展開していたのかを伝える記録はほとんどないが、文書を使用していたものと推察される。詳細な内容までは不明だが『三国史記』職官志上に、真平王43年（621）に倭典を領客典に改編した内容がみられる点は、これを十分想起させる³³⁾。

何より、領客典設置前の程近い時期に、円光をはじめ曇育・智明などの僧侶が中国から帰国したことが注目される³⁴⁾。新羅仏教は王室の積極的な援助を受けた求法僧を通じて発展したが、王室は僧侶らに対して宗教的側面のみならず多方面の分野にわたる活躍を期待していた³⁵⁾。このことは、『三国史記』真平王30年（608）条にみられるように、真平王が高句麗攻撃に先立ち隋に出兵を要請する文書を、王命により円光に代筆させていたことからわかる³⁶⁾。7世紀初の新羅では、円光のように中国に留学した経験を持つ僧侶（学生）が数多く帰国し、彼らが仏教活動にとどまらず外交にも深く関与していた。彼らの留学経験並びに活動は、隋との外交に多大な役割をなし、領客典など真平王代における外交機関の整備にも直接関与したと考えられる。

さらに、このような対隋外交の成果は対唐外交にも継承された。618年（真平王40）に唐が建国されると、高句麗は619年に唐に使節を派遣したが、新羅も621年（真平王43）に高句麗・百済と同時に唐に使節を派遣している³⁷⁾。唐建国後の新羅の動向は、前述の対隋外交の始動を考えれば極めて迅速な対応といえる。それに加えて、この時唐は、新羅にのみ使節庾文素を派遣し、新羅に対しては高句麗や百済と異なる対応を取っていることがわかる。このように真平王代の後半に新羅が唐と新たな外交関係を築くことができたのには、前述の内政整備後に推進された対外政策が功を奏したと考えられる。特に恒常的な対中国外交を実施するためにその業務を統括する行政機構の確立をめざし、621年に倭典を改編し領客典を設置したことは大きな原動力となったであろう。

ともあれ、こうした対中国外交の成功は当該期の新羅の外交活動に多大な影響を及ぼし、これ以後真平王は積極的な対外政策を選択することができるようになったといえる。これにより新羅の対外意識も高揚したことは想像に難くない。とすれば、前章で指摘した621年に新羅が倭に文書を持参したのは（史料④-（1））、決して偶然な出来事ではなく、対中国外交の影響を受けて成立した新たな外交政策を倭に示した姿であったことが読み取れる。そして、対中国外交の成果は外交活動だけでなく新羅内政にも影響を及ぼし、王権強化を一層促進する要因にもなったようである。真平王は、唐と最初に外交関係を結んだ同王43年（621）の翌年に内省を、624年には侍衛府を設置するなど、内政整備に一層従事したのである。特に王室の財物と田荘・奴婢などを管理する内省の設置は、国制上での王室財政の制度的確立を意味しているので、その意義は極めて大きい³⁸⁾。また国内外政策への自信を得た真平王43年（621）は、同王には男子がいなかったものの長女の徳曼（善徳王）を王位継承者に内定することで、当代の新

羅王権において最大の弱点であった後継者問題までを解決している³⁹⁾。

以上新羅では、対倭外交を再開した真平王32年(610)からこれを本格化させた同王44年(622)までの間に、外交並びに内政面の整備によりこれまでにない充実期をむかえるのであった。つまり、真平王43年・44年に推進された対倭外交は、新羅王権の外交・内政面での成功をもとに実現されたのであり、次に検討する具体的様相には真平王後期の対倭政策が直接反映されていたといえる。

3. 真平王代後期にみられる対倭外交の諸相

一 『日本書紀』推古30年秋7月条の検討を中心に一

1) 真平王の対倭意識と秦寺・四天王寺への仏像・仏具施入

真平王はいかなる対倭意識及び態度で在位後半より対倭外交を展開したのか、上に整理した史料とその概要をもとに具体的に探してみたい。

まずその中でも、この時期に真平王が倭に仏像をはじめとする仏教文物を送った理由である⁴⁰⁾。史料⑤-(2)・(3)では、622年(真平王44)に新羅使が倭に持参した仏像の種類は記されていないが、それが葛野を本拠とする秦河勝と関わり深い秦寺(現在の広隆寺⁴¹⁾)に施入されたことが確かめられる⁴²⁾。広く知られているように、広隆寺に現存する本尊の仏像は弥勒菩薩半跏思惟像である。これについては、古く田村圓澄氏に次のような指摘がある。7世紀前後の新羅慶州やその周辺地域では弥勒菩薩半跏思惟像が多数発見されているため、広隆寺の仏像はそれらと同一なものともてよいとされる⁴³⁾。さらに近年の研究成果として、林南壽氏は、実際に広隆寺に現存するほぼ等身大の二体の弥勒菩薩像(いわゆる「宝冠弥勒」と「泣き弥勒」)をとりあげて、各々の像容を美術技法に即して同時代の朝鮮半島及び日本国内の仏像と詳細に比較検討することで、「宝冠弥勒」は7世紀初期に新羅で制作され倭に将来したものであり、「泣き弥勒」は7世紀後半の天武朝ごろに日本で制作されたものであることを立証している⁴⁴⁾。すなわち、「宝冠弥勒」は622年(真平王44)に新羅使が貢納した仏像に該当することが明白となったといえる。また田村氏の研究によれば、後世の資料ではあるが『太子伝古今目録抄』所載の『大同縁起』に四天王寺金堂の本尊を「弥勒菩薩一体蓮華坐」と記載することから、四天王寺の仏像も弥勒菩薩半跏思惟像であった可能性が高いことを指摘する⁴⁵⁾。加えるならば、史料③の616年(真平王38)に新羅が倭に送った仏像も弥勒菩薩像と推察されるのである⁴⁶⁾。

それならば、新羅が倭に弥勒菩薩像を送った明確な理由が存在したことになる。その意味を解明するためには、やはり新羅の真平王代の王権と仏教の関係を念頭に検討してみる必要があるだろう。真平王代の新羅国内で弥勒信仰が流行していたことは既往の研究でも数多く指摘されているが⁴⁷⁾、特に弥勒信仰と貴族勢力の深い関係を垣間見ることができる。李基白氏の詳細な研究によると、当時の新羅では国王を転輪聖王または釈迦仏に比定し、花郎(青年貴族)を弥勒

菩薩の化生とすることで、王権と貴族勢力が仏教信仰の面で一定の秩序を保っていたと指摘する⁴⁸⁾。すなわち新羅では、仏教を通して貴族と王権が互いに出会っていたといえ、この時の王権と貴族の関係は釈迦と弥勒の関係のようなものであった⁴⁹⁾。

こうしたことを踏まえると、616年と622年に真平王が倭に仏像、その中でも弥勒菩薩像を送った理由が明らかにされるのではないか。これらの行動をとった真平王は、新羅と倭の関係を新羅国内での釈迦と弥勒の関係になぞらえていたと推察されるのである。

また、622年に仏舎利を倭に送った行為は、一層注目する必要がある。当時の新羅では、仏舎利が納められていた塔は釈迦を象徴しており、釈迦は王権を象徴していたと考えられるためである⁵⁰⁾。真平王がそのような性格の仏舎利を622年に倭に送った目的は、新羅の王即仏思想⁵¹⁾を、倭にまで普及させようとした試みであったのではないか。

ところで当時の倭では、すでに百済からもたらされた仏舎利を所有していた。『日本書紀』崇峻元年(588)是歳条には、588年(真平王10)に百済の威徳王が倭に僧侶と共に仏舎利を与えたと記録する⁵²⁾。このように倭がその前より百済から仏舎利を受けていたとすれば、上記のような行為は、仏舎利を送る国が百済から新羅に変化したことを意味する。このことも、当時の倭王権内での仏教の位置付けを考えれば、極めて重要なことと思われる。

そこで、新羅における仏舎利の受容及び舍利信仰について簡単に触れておきたい。新羅では、『三国史記』真興王10年(549)春条を通して、梁が新羅へ留学僧覚徳の帰国と合わせ仏舎利を送ると、真興王が百官に命じて興輪寺道でそれらを迎え入れたとあり、549年に初めて仏舎利を受容したことが窺い知られる。そして真興王37年(576)には、隋で仏法を学んできた安弘法師が楞伽経・勝鬘経及び仏舎利を持ち帰ったとする⁵³⁾。これ以後新羅国内では、中国から受け入れた仏舎利をもとにした舍利信仰を飛躍的に発達させたとみられるが、622年段階になるとこれを倭にまで拡散することができる立場になったといえることができる。

このように新羅真平王代の王権と仏教の関係は、まず前代からの釈迦仏信仰と舍利信仰により成り立っていた⁵⁴⁾。さらに当代には、護国経的な性格の色濃い仁王経が尊重され、国家の平安を祈るために仁王経を講読する法会である百座講会が開かれていた⁵⁵⁾。それに合わせて真平王は、613年に隋使節の王世儀が皇龍寺を訪問した際には百高座を催し、前述の円光をはじめとした高德の僧侶を率いて説経したとされる⁵⁶⁾。

そして何より、帰国後の円光の活動により、仏法と王法の一致、さらには護国と護法の一致を促進させ、以後新羅国内ではそのような仏教思想が外交関係や戦争と密接な関係をもち展開したのであった⁵⁷⁾。こうしたことは、円光の言動から直接窺い知られる。彼が戦争や文書外交の活動に深く関与したことは前述したが、その過程で真平王に「貧道在大王之土地、食大王之水草」⁵⁸⁾と語っていることが殊に注目される。円光たちは、新羅の土地を仏法の主体者である王の仏国土と認識していたといえる。当時の新羅仏教は、国王＝法王という王即仏・仏国土思想をもとに形成されていたことを鮮明に伝える。

これらを念頭におけば、真平王44年(622)に新羅が倭に仏舎利及び仏像と様々な仏具を送った背景が一層明確となろう。繰り返しになるが新羅仏教は、真平王44年(622)の段階に至ると、その時まで中国に依存していた仏舎利などの仏教文物を倭に送り与えるところまで発展していた。さらにこれらの仏像・仏具は、新羅王権を象徴する文物である様相が窺われ、国王=法王の王即仏思想を倭にて実践する上で大きな効果をなしたことが想定される。すなわち真平王は、対中国外交の成功と王権強化を実現することによって自身の世界を他の国々にも見せつけようとし、仏像・仏具を倭に送ることで真平王(新羅)の仏国土に倭を引き込もうとしたと考えられる。こうした行為は、四方世界に君臨する国王である真平王の統率下に倭王を置く、新羅の中華思想の一側面を物語っているといえよう。

加えて注目したいのは、飛鳥寺ではなく難波の四天王寺に仏舎利や仏具が施入された事実である。倭の推古大王代(593~628)には、外国から来航した僧侶はもとより重要な仏教文物や先進文物は、通常であれば飛鳥寺に集められたからである。当時の飛鳥寺は、前述のように百済・高句麗などから来た僧侶たちが定住し、倭王権の重要な政策決定の場であり外交儀礼なども執り行われていた。それゆえ、飛鳥寺に代わり四天王寺が新たに外交に関わる施設として登場し、仏教文物の中でも最も重要な仏舎利がそこに施入された意味は深い。さらには、この仏舎利はこれまでのように百済のものではなく新羅から送られたものであった。こうしたことは、既存の飛鳥寺を中心とした倭王権の外交政策に何らかの変化が生じた可能性も読み取れる。

逆にそれ以上に新羅の立場では、真平王は倭への使者派遣に際し百済と高句麗に対抗する意味も込めて、倭王権が既存の飛鳥寺ではなく四天王寺を選択するよう働きかけたことが想起できるのである。特に四天王寺の伽藍配置は塔を中心に創建されており⁵⁹、新羅が貢納した仏舎利が視覚的に果たす役割も一層大きかったと思われる。

ところで四天王寺は、『日本書紀』によると推古元年(593)に創建されたというが、この創建記録には幾分疑問が呈せられている⁶⁰。上の史料⑤の内容をもとに、622年(真平王44)前後に創建されたとみる見解が優勢なのである⁶¹。なお、後世の史料の『太子伝古今目録抄』『大同縁起云』には、「二重金堂一基、阿弥陀三尊、右恵光法師従大唐請坐者」と記載している。『大同縁起』では、史料⑤-(2)(3)にみる新羅が送ったとする仏像に対して、史料⑤-(4)の大唐学問僧の恵光が唐から持ち帰ったものとしている。この史料内容については、新羅製の仏像ではなく恵光が唐から持参した品と説明することで寺院を高めようという、縁起の性格と相通する潤色であったとみるのが妥当であろう。

とはいえ、622年に新羅使節が送り届けてきた在唐留学生の一人恵光が、(3)により同年に新羅の多様な仏教文物が施入されたことが明らかな四天王寺に、上の仏像を直接貢納したことを述べている点は注目される。上の両史料を通し、恵光と四天王寺の間に深い関係があったことに加え新羅の介在が確かめられるのである。とすれば真平王は、新羅を経由して帰国した恵

光を介して、仏舎利などの仏教文物を四天王寺に貢納させたと考えることも十分可能である⁶²⁾。さらに、これらの行為が恵光らが在唐留学生と新羅使節の親密な関係のもと実現されたのであれば、四天王寺は創建当初より新羅と何らかの関係があったといえる。

これに関連して、四天王寺が立地した難波の特質にも目を向けてみたい。難波には早くから難波津を中心に、外国からの遣使を受け入れる機関や宿泊施設があった⁶³⁾。『日本書紀』からも、608年(推古16)に隋使を饗応した場所の難波大郡や滞在施設の館(難波館・高麗館・三韓館)などの存在が確かめられる⁶⁴⁾。倭に来た使節の大半は、難波津を経由し宮都である飛鳥に入ったのであった⁶⁵⁾。このことからしても、新羅から送られた仏舎利をはじめ金塔及び大観頂幡・小幡など多くの仏具が、外交使節の訪問地である難波の四天王寺に施入された明確な背景・目的が存在したとみられる⁶⁶⁾。これらの文物は、宗教的な側面のみならず難波で行われる外交儀礼にも使用されたことまで想定できるのである。

例えば、観頂幡が四天王寺で成し遂げた役割について考えてみたい。『三国史記』善徳王12年(643)秋9月条には、当時の新羅国内でこのような幡が使用された場面が登場する。この記録では、唐太宗が新羅の援兵要求を受け入れる代わりに3つの策を提示しているが、その第2策で太宗が唐の赤色の服と赤幟を新羅に与えて高句麗・百済の軍隊が新羅を攻撃しないようにしたという内容がみられる。これにより唐が新羅に送った幟は、新羅内外でも唐皇帝を表象していたことが読み取れる。つまり唐はこれらを送ることにより、新羅にまで唐帝国の心的効果を伝授しようとしたとみることができる⁶⁷⁾。

これらを念頭におくと、真平王が倭に送った幡も、四天王寺で新羅を示す視覚的象徴物として機能したと推定される。とすれば新羅が倭に幡を送った理由も、倭国内における外交と関わり深い場所で、新羅の国力を表現することにあつたとみてよいのではないか。そこには仏教的な役割を超えて外交機能までも有していたわけである。

ここでは、真平王が倭に仏像・仏具を貢納した理由とそれらが秦寺・四天王寺に施入された意義を検討した。この時真平王が仏教文物を倭に送った行為は、円滑な対倭外交の展開をめざしたものではあるが、倭に追従した新羅側の消極的な外交政策であったとは考えられず、新羅の仏教思想ひいては世界観を倭にまで拡大しようとした積極的な外交姿勢であったとみてとれる。

2) 対倭外交における在唐倭人留学生との関係強化

前述に加えて、真平王44年(622)に新羅使節が在唐倭人留学生(大唐学問僧)を倭に送り届けた理由についても再検討の余地があろう。これについては、古く田村圓澄氏がこうした新羅の行為を送迎外交や中継外交と定義して以後⁶⁸⁾、大多数の研究者はそのままこの見解を受け入れている。新羅側の意図としては、倭の留学生を送迎することを介して倭を唐中心の政治世界に参加させ、その中心的立場から高句麗・百済を牽制しつつ唐との間で安定した外交を展開

することにあつたという趣旨が強調されてきた⁶⁹⁾。しかしながら、上で検討した真平王代後期の新羅王権をとりまく国内外情勢を踏まえれば、既往の研究のように新羅が半島内の不安要素を打開するため低姿勢で倭に留学生を送り届けたとは考えられない。むしろ、新羅中心の世界観のもとで対倭外交を実現すべくのもんだ政策と推察される。

さて、真平王代の新羅と在唐倭人留学生の関係を総合的に検討するために、次の表3では、後の善徳王代の例も交えつつ倭の遣隋使・遣唐使の経由地を整理してみた。

表3 倭国の遣隋使・遣唐使の経路と留学生（僧）

西暦	新羅	倭	出発地	到着地	経由	学問僧・学生
600	真平王 22	推古 8	倭	隋		
607.7	真平王 29	推古 15	倭	隋		
608.4	真平王 30	推古 16	隋	倭	百済	
608.9	真平王 30	推古 16	倭	隋		唐国学生倭漢直福因・奈羅訳語恵明・高向漢人玄理・新漢人大国・学問僧新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隠・新漢人広濟ら
609.9	真平王 31	推古 17	隋	倭		
614.6	真平王 36	推古 22	倭	隋		
615.9	真平王 37	推古 23	隋	倭	百済	
622.7 (623)	真平王 44 (45)	推古 30 (31)	唐	倭	新羅	大唐学問者僧惠斉・恵光・医恵日・福因ら
630.8	真平王 52	舒明 2	倭	唐		薬師恵日
632.8	善徳王 元	舒明 4	唐	倭	新羅	僧霊雲・僧旻・勝鳥養
639.9	善徳王 8	舒明 11	唐	倭	新羅	大唐学問僧恵隠・恵雲
640.10	善徳王 9	舒明 12	唐	倭	新羅	大唐学問僧清安・学生高向漢人玄理

これを参考にすれば、610年代（真平王中期）まで倭の対中国外交を援助した国は百済といえる。倭の隋への使節は、百済を経由して帰国（派遣も？）している。例えば、倭の遣隋使が百済を経由したとき国書を失ったという記事⁷⁰⁾などが参照される。ところが、真平王44年（622）を契機に、それ以降の倭の対唐外交は新羅を経由するように転換したことがわかる。特に、僧恵斉・恵光、医恵日・福因らの在唐倭人留学生が初めて新羅使節の送迎のもと帰国した622年は、百済・高句麗の使節も唐に滞在していたことが指摘されているため、両国でなく新羅が選択された明確な事情が存在したといえる。というのも、この時期の唐の外交的態度は百済と新羅の間でさほど違いはなかったとする既往の研究にしたがえば⁷¹⁾、倭の立場では、新羅側から何らかのアプローチがなければこれまで通り百済を選択した方が無難であったと考えられる。ここからも、この時の新羅経由での帰国背景には、実施した新羅側の確固たる対倭政策が読み取れる。

ところで、前述のように新羅は、既存の百済・高句麗のように対倭外交において直接僧侶を送る態度はとらなかった。それゆえ在唐倭人留学生を倭に送り届けた行為は、その代わりであったとみなすことができる。とすれば、新羅が僧侶派遣を通じた対倭外交を拒否して、留学生との関係を結ぼうとした意図は何であったのか。表3によると、新羅と倭の間で留学生を通じた外交関係はその後も継承されていることが確かめられる。真平王に続いて即位した善徳王の代の632・639・640年に新羅が倭に使者を派遣したときにも、すべて在唐留学生を送り届けているのである。

上のような新羅使節に伴われて帰国した在唐留学生がその後どのような活動に従事したかは、既往の研究でも詳述されている。やや後になるが、645年の乙巳の変（大化改新）後に成立した孝徳王権では、唐から帰国した僧旻と高向玄理を国博士に任命している。特に高向玄理は、新羅最高位の金春秋（後の武烈王）と深い関係にあったことが立証されている⁷²⁾。唐に留学経験のある彼らは、倭王権内外で多岐にわたって影響力を持ったといえる。

こうした状況は、622年（真平王44）の唐から帰国した最初の留学生にも当てはまると考えられる。史料⑤-(5)をみると、恵日などは倭に帰国するや、唐国との往来をはじめ新たな外交政策を提案している。なお、こうした恵日の建議を契機にして、倭王権内部では新羅支持派と百済支持派が外交政策を巡って対立する事件も起きていることが指摘されている⁷³⁾。ここからもすでに当初から、在唐留学生の言動は、倭王権の国家政策に作用していたことが窺い知られる。

したがって、真平王が在唐倭人留学生を受け入れ、彼らを通じて対倭外交を展開したわけも、ここにあったことは相違ない。さらに、在唐倭人留学生を送り届けた新羅使節は、唐から直接倭に向かったのではなく、新羅に一時帰国し再度倭に派遣されたと推定される。この点は本研究の先駆者の田村氏が指摘しているが、今一度これを裏づける史料的根拠をあげてみたい。

王遣使大唐，朝貢方物。高祖親勞問之。遣通直散騎常侍度文素來聘，賜以璽書及画屏風錦綵三百段。（『三国史記』真平王43年（621）秋7月条）

新羅，高句麗，西域二十二国并遣使朝貢。（『冊封元龜』外臣部・朝貢条・武徳4年（621）10月条）

遣使大唐朝貢。（『三国史記』真平王45年（623）冬10月条）

上の史料によると、まず、621年10月に唐入朝（7月に都慶州を出発）を果たした新羅使節の帰路に、唐王朝は百済・高句麗への対応と異なり新羅に唐使（通直散騎常侍度文素）を派遣しているが、622年7月に新羅使節が倭に送り届けた留学生たちはこの時の新羅・唐使節に同伴していたことが想起できるのである。そして、623年10月に新羅が唐に朝貢しているのは、諸々の外交業務を終えたこの唐使を送り届ける役目を兼ねていたと推察される。とすれば、新

羅に滞在する間の倭人留学生は、直接真平王に謁見し新羅の外交儀礼や諸行事に参席する場合もあったと考えられる。新羅国内での外交儀礼の場などで、真平王が対倭外交の方針を倭人留学生たちに助言や要求をもとめる一幕もあったのではないか。

こうした背景を踏まえれば、新羅を経由して戻った恵日などの在唐留学生が帰国直後に倭王権に提言した、史料⑤-(5)の「且其大唐国者、法式備定之珍国也。常須達」の内容及びその事情は極めて注目される。何よりこの史料にみえる法は、仏教留学の恵日ら（恵日と福因は医学生とみられる）が提言したことを念頭に置くと、単に政治的な法律ではなく、僧綱制など仏教と関連した法の性格を含む可能性が想起される。

これに関連して、翌年の記録である『日本書紀』推古32年（624）4月戊申条（前述の通り実際の年は推古31年（623）である）には、日本の僧綱制の起源ともいえる記載がみられる⁷⁴。この記事は、説話的要素が多く『日本書紀』編纂段階に潤色された可能性が高いためそのまま受け入れることはできないが、百濟僧観勒が倭の仏教の未熟性（「以僧尼未習法律、輒犯惡逆」という内容）を上表すると、推古大王はこれを認め僧正・僧都等を整備したという趣旨の内容である。また、この時は観勒自身が僧正に任命され、翌年には高句麗から来た恵灌が僧正に任命されたことを知らせる⁷⁵。すなわちこの僧綱制は、当時飛鳥寺に集まった百濟僧・高句麗僧を中心に創設されたということができる。

そのため、その前年に新羅使と一緒に帰国した恵日などが法式を備えた唐との往来を提言したのは、それらの動きと何らかの関係があったと推察される。恵日らが、このような建議をした背景には、百濟・高句麗の僧侶への対抗意識があったのではないか。新羅の援助を受けた留学生たちは、新羅とも深いパイプを有していて、その提言には新羅王権の意向が存在した可能性まで想起させるのである。言うならば新羅王権は、飛鳥寺のような倭の政策決定の場で百濟・高句麗から派遣された僧侶に対抗する存在として、在唐留学生を受け入れ関係を強化することで、有利に対倭外交を推進しようとしたと思われる。

このように、新羅使節が仏像・仏具を倭王権に貢納したとき、同伴の在唐倭人留学生が法について建議したのは、偶然な出来事ではなく密接な関係があったことがわかる。なお、史料⑤-(5)で恵日らが法式の備えた国として唐のみを推薦したように記しているのは、8世紀に編纂された『日本書紀』の段階で、日本の大国意識（中華思想）を表現するために蕃国である新羅の存在を払拭したことによるためと考えられる。したがって、恵日らが提言した法は、上のように百濟・高句麗に対峙して出されたとすれば、文脈通り唐の法とはいえなくなり、対立する新羅の法であった可能性が浮上するのである。

そこで最後に、新羅、なかでも真平王代の法の実体について考えてみたい。その一面は、真平王13年（591）前後の記録とみられる『南山新城碑』第9碑の中の、「・・南山新城作節如法作後三年崩破者・・」の記述を通して窺い知ることができる。この碑が建てられた慶州南山は、7世紀以降、新羅王京に隣接し仏法具現の中心地（仏国土）として機能していた⁷⁶。した

がってこの法は、既往の研究でも、具体的には律令を指し示すのであるが、広くは仏法を意味するものと考えられている⁷⁷⁾。真平王代の新羅では、国王は律令と仏法の調和のとれた具現体として認識されていたのである⁷⁸⁾。また前述のように、円光が中国から帰国して世俗五戒⁷⁹⁾を広めた真平王代の中期直後は、詳細な内容は窺い知れないが法の形成が一層促進された時期であった。こうしたことから、新羅の援助で帰国した恵日らが倭王権に提言した法には、当時の新羅の思想的影響が色濃く反映されていたとみてとれる。

いずれにしても、留学生が帰国直後に新たな外交政策を倭王権に建議した意味は大きく、その背景には彼らを送り届けた新羅側の積極的な働きかけを想定しておく必要がある。新羅の援助を受け新羅経由で帰国した留学生は、時として新羅王権の意向にもとづき行動することもあったのではないか。新羅王権が在唐倭人留学生に接近し関係を強化したのは、これらを推進するための対倭政策の一環であったと考えられる⁸⁰⁾。先に、新羅は真平王代後期に入り倭に仏教文物・思想を伝授し、それらを通じて倭国内でいわゆる「新羅化」を模索したことに言及したが、真平王44年(622)から留学生を送迎する行為を続けたのも、同様の趣旨が読み取れるのである。

おわりに

本稿は、日本古代史では周知の内容である『日本書紀』推古紀にみられる、真平王代後期に展開された新羅の対倭外交について、既往の研究と異なり新羅史の観点から検討した。これを通して、真平王代後期の対倭外交は、従来の指摘のように百済・高句麗との対立から倭の支援を引き出そうとした従属的な態度で始まったのではなく、対隋・唐外交の進展と国内の官制整備を達成した自信をバックに、積極的な外交政策のもと実行されたことを明らかにした。本文で論じた内容を整理すれば次のようである。

まず、真平王代(579～632)に展開された対倭外交の特徴をみれば、真平王は在位後半に至るまで倭に対しほとんど外交活動を実施しなかったが、真平王32年(610)を契機に態度を大きく変化させた。これ以後、真平王は立て続けに使者を派遣し倭と活発な外交活動を推進している。

次にこうした背景及び要因を検討したが、即位直後から着手した真平王の国内外政策の成功が原動力となったと考えられる。真平王は、国内の官制整備が一段落する真平王16年(594)に、隋に使者を派遣して対中国外交を始動した。さらに唐が建国されると、領客典を設置するなどその動きを一層加速化させている。こうした関係をもとに高句麗・百済に対抗できるまでの外交能力を獲得したが、真平王はそれらをもとに一層王権強化を実現し、後期には対外意識が大きな高まりをみせたのである。

それゆえ、当該期の対倭外交は、積極的な外交政策のもと展開したとみられる。新羅側の新

たな動向は、日本側の記録であるが『日本書紀』の内容にみられる通りであり、まず真平王代後期から倭に多くの仏教文物を送り始めている。特に真平王44年(622)は、新羅使節が仏像及び仏舎利・幡など多くの仏具を持参する様子が鮮明に確かめられる。さらにこのときは、百濟や高句麗の僧侶たちが集まる飛鳥寺に代わり四天王寺が新たに登場し、新羅が送った仏舎利などの仏教文物はそこに施入されている。

この要因を考える上で注目されるのが、真平王代の新羅国内での仏教の役割である。新羅では、前代の真興王以降国王を転輪聖王・釈迦仏に比定し貴族を弥勒菩薩とすることで、王権と貴族勢力が一定の秩序を形成していた。新羅仏教が王権を象徴する思想的基盤であったとすれば、新羅が貢納した仏像・仏具も同じく新羅王権の象徴物であったことは明らかであろう。したがって真平王は、このような仏教文物を倭に送り新羅の王即仏思想を伝えることで、倭王を真平王の仏国土に引き込もうとしたと考えられる。

さらに同じ622年には、新羅使節が新羅経由で在唐倭人留学生を倭に送り届けている。この時から新羅と倭の間では、留学生を通じた外交関係が真平王に続く善徳王代まで継承されたのである。こうした留学生は、帰国直後に新たな外交政策を提言した恵日らの言動からわかるように、倭の外交活動に直接影響を及ぼす存在であった。なおこの時恵日らが提言した法式は、百濟・高句麗の僧侶(仏法)に対峙する性格が垣間見られることから、唐の法よりは新羅の法であったことも想起させる。このように真平王は、622年を契機に在唐倭人留学生とも関係を築きながら、倭に新羅の思想・制度などを伝播させようとし、それらを通じて倭国内でいわゆる「新羅化」を模索したことまでが推察される。

ただし新羅は、より詳細に両国の関係をみていくと、622年以降は善徳王元年(632)に至るまで倭に使者を派遣するのを一時中断している。この背景には、上で論じた新羅側の仏教文物を介した積極的な外交姿勢を倭が受け入れなかった可能性は十分ある。また何より、新羅王権をとりまく対倭政策並びに国内外事情に一層目を向ける必要があるだろう。630年代(真平王末～善徳王代)の新羅と倭の関係史は、多くの研究蓄積がある640年代(乙巳の変前後)に比べて極めて不明な点が多いので⁸¹⁾、これについては別稿の機会を持ちたく思う。

◎追記

本稿は、단국대학교 일본연구소『일본학연구』제 22 집, 2007.9(檀国大学校日本研究所『日本学研究所』第22集, 2007年9月)に掲載された、本稿と同題の韓国語文(「新羅 眞平王代 後期の對倭外交—眞平王의 對倭政策과 관련하여—」)を、若干の加筆・修正を加えて日本語で公表するものである。

註

- 1) 真平王代の政治・外交・思想などの各方面にわたる研究史及び概要は、李晶淑『新羅真平王代の王権研究』（梨花女子大学校博士学位論文、1995）及び、前者の博士論文の一部を含む既往の論稿を一書にまとめた李晶淑『新羅中古期の政治社会研究』（恵眼、2012）に詳しい。
- 2) 真平王代の新羅と倭の関係を扱った専門的な研究には、田村圓澄「大唐学問僧の帰国と蘇我氏の滅亡」（『東アジアの古代文化』88、1996）、田村圓澄「新羅・倭の「仁王経」」（『古代国家と仏教経典』吉川弘文館、2002）がある。また、真平王代を中心とした羅倭関係史に触れた代表的な研究成果は次の通りである。しかしながらこれらの成果は、倭国の立場から論じられたもので、新羅史の側から研究されたものではない。
平野邦雄「新羅・百済両国の関係」（『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館、1967）、井上光貞「推古朝外交政策の展開」（『聖徳太子論集』平楽寺書店、1971）、鬼頭清明「推古朝をめぐる国際的環境」（『日本古代国家形成と東アジア』校倉書房、1976）、田村圓澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』（吉川弘文館、1980）、田村圓澄『日本仏教史4百済・新羅』（法蔵館、1983）、金鉉球「多面外交と蘇我氏」（『大和政権の対外関係研究』吉川弘文館、1985）、山尾幸久『古代の日朝関係』（塙書房、1989）、坂元義種「東アジアの国際関係」（『岩波講座日本通史第2巻古代1』岩波書店、1993）、新川登亀男『日本文化史の構想』（名著刊行会、1994）、鈴木英夫「任那の調」の起源と性格」（『七世紀中葉における新羅の対倭外交』（『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店、1996）、金恩淑「倭国との関係」（『韓国史7』国史編纂委員会、1997）、沈京美「新羅中代の対日関係に関する研究」（『統一新羅の対外関係と思想研究』白山学会、2000）、浜田耕策「新羅人の渡日動向一七世紀の事例一」（『新羅国史の研究』吉川弘文館、2001）、森公章「倭国から日本へ」（『日本の時代史3—倭国から日本へ—』吉川弘文館、2002）、延敏洙「古代韓日外交史—三国と倭を中心に—」（『韓国古代史研究』27、2002）、鄭炳三「古代韓国と日本の仏教交流」（『韓国古代史研究』27、2002）、熊谷公男「国家形成期の倭国の対外関係と軍事」（『日本史研究』654、2017）など。
- 3) 日本古代史の分野では、この時代の羅倭関係については、厩戸皇子（聖徳太子）や蘇我馬子の外交政策、飛鳥時代の仏教、加耶地域の問題、遣唐（隋）使の派遣問題などに絡めて研究されてきた。すなわち、日本古代国家形成史の一分野にとどまっているとって過言ではない。
- 4) 註2)の論稿をはじめ韓国の研究者の間でも、真平王代の新羅の外交政策については、中国と倭の間の中継的な側面しか注目されてこなかった。
- 5) 7世紀中葉（640年代）善徳王代の金春秋の活動を通してわかるように、当該期の外交は国の存亡と直結していた。善徳王代の国内外情勢と金春秋の活動については、朱甫敏「金春秋の外交活動と新羅内政」（『韓国学論集』20、1993）、鈴木靖民「東アジアにおける国家形成」（『岩波講座日本通史第3巻古代2』岩波書店、1994）、木村誠「朝鮮古代史における国際的契機—新羅・毗曇の乱の再評価—」（『歴史学研究』782、2003）などを参照。ところで、真平王代後期の外交は、善徳王代につながる重要な時期と考えられる。
- 6) 延敏洙「『日本書紀』の任那条における関係記事の検討」（『古代韓日関係史』恵眼、1998）に詳しい。
- 7) 李晶淑「王権強化と仏教」前掲博士論文。
- 8) 西本昌弘「倭王権と任那の調」（『ヒストリア』129、1990）などを参照。
- 9) このような視点は、延敏洙前掲論文2002をはじめ、ほとんど変わらず継承されている。
- 10) また、『日本書紀』推古31年（623）是歳条にも新羅出兵記録がみられる。ところで、この記録と本文で言及した記録は、記載内容がほぼ同じである。また、出兵時の編軍記録が701年以降の大宝令下に出てくる内容であるため、これらの記載の大半は潤色された可能性が高いと指摘されている（鬼頭清明前掲論文）。また金恩淑前掲論文は、これらの新羅出兵記録は百済系亡命渡来人が作成したものと推測する。
- 11) 李晶淑「王権強化と政治的基盤」前掲博士論文、金瑛河「新羅政治体制の変遷過程」（『韓国古代社会の軍事と政治』高麗大学校民族文化研究院、2002）を参照。
- 12) 李晶淑「真平王の即位背景と政局推移」前掲書。
- 13) さらに確実な事例ではないが、真平王13年（591）には領客府令2名を置いたとする。

- 14) 鈴木靖民「新羅の倭典について」(『古事類苑月報』33, 1969)。
- 15) 新川登亀男前掲書1994, 新川登亀男『日本古代の対外意識と仏教—アジアの中の政治文化—』(吉川弘文館, 1999)を参照。
- 16) 仏教文物に加えて、『日本書紀』推古5年(597)4月条によると、この時期百済は王子阿佐を倭に派遣している。以後百済は、631年(舒明3)にも王子豊璋を派遣するなど、倭に王子を数度派遣している。なお、7世紀代の百済と倭の外交関係を扱った専論には、盧重国「7世紀百済と倭との関係」(『国史館論叢』52, 1994), 朴珉慶『6～7世紀・百済の対倭関係研究』(成均館大学校博士学位論文, 2014)がある。盧重国前掲論文は、倭が隋に接近したことにより、以後百済と倭の関係は悪化したと論じている。しかし、倭の遣隋使の派遣を援助したのは、後述するように百済である。そのため盧重国氏が論じるように、百済と倭の関係において、603年(推古11)が大きな転機であったとは考えられない。むしろ、百済と倭の関係における大きな転機は、本稿で検討する622年ではないかと思う。
- 17) 飛鳥寺の造営過程は、森公章前掲論文2002に詳しい。なお最近の研究では、百済王興寺との共通性が数多く指摘されてきている(近藤浩一「百済・威徳王の寺院建立と孝思想—陵山里寺院・王興寺よりみた東アジア仏教文化交流の一側面—」『京都産業大学日本文化研究所紀要』18, 2013)。
- 18) 田村圓澄前掲書1980など。
- 19) 発掘された飛鳥寺の西広場は、特にこのことを物語る。詳細は、小澤毅「飛鳥の都」(『日本の時代史3—倭国から日本へ—』吉川弘文館, 2002), 今泉隆雄「飛鳥の須弥山と斎槻」(『古代宮都の研究』吉川弘文館, 1993)などを参照。
- 20) 新川登亀男前掲書1994, 清武雄二「ヤマト王権の仏教政策と外交政策」(『國學院大学大学院紀要文学研究科』27, 1996)。
- 21) 李成市「高句麗と日隋外交—いわゆる国書問題に関する一試論—」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店, 1998)。李成市氏の見解に若干補足すれば、この時期倭王権内では、百済僧の活動も活発になっていた(白美善「泗泚時代における百済の対倭仏教交流と恵聡」『韓国思想史学』34, 2010)。そのため、百済僧の関与も指摘することができよう(清武雄二前掲論文)。
- 22) 井上直樹「六世紀末から七世紀前半の東アジア情勢と高句麗の対倭外交」(『朝鮮学報』221, 2011)。この論稿は、高句麗の立場から7世紀前半の倭と朝鮮半島の外交史を再考した希有な成果である。
- 23) 倭の対新羅意識と新羅の対倭意識は一致するものでないため、真平王代のそれは新羅の立場から検討する必要があるだろう。
- 24) 延敏洙前掲論文2002も、この610年の対倭外交に注目する。ただしこの研究も、倭の立場から言及されたものであるため、新羅側の事情はほとんど考慮されていない。
- 25) 井上光貞前掲論文, 田村圓澄前掲書1983, 新川登亀男前掲書1994など。
- 26) 真平王代の対中国外交を扱った専門的な研究には、李晶淑「真平王代の対中交渉」前掲書がある。また、申澄植「中国との関係」(『韓国史7』国史編纂委員会, 1997), 李昊栄「対中国積極外交」(『新羅三国統合と麗・済敗亡原因の研究』書景文化社, 1997), 金子修一『唐隋の国際秩序と東アジア』(名著刊行会, 2001)は、三国時代の新羅と中国の関係を年代別に整理する。
- 27) 新羅の文書外交を扱った研究としては、栗原朋信「上代の日本へ対する三韓の外交形式」(『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館, 1978), 石井正敏「古代東アジアの外交と文書」(『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館, 2001)などがある。
- 28) 申澄植前掲論文, 金子修一前掲書を参照。
- 29) 新羅は隋と遅れて外交関係を結んだにもかかわらず、隋は新羅に対し比較的友好な態度をとっていた。この背景には、隋は高句麗遠征を計画していたからと推察される。
- 30) 李晶淑「真平王代の王権強化と帝釈信仰」(『新羅文化』16, 1999)。また李晶淑氏は、そのような自信が思想面に影響を及ぼし、聖骨観念の形成と帝釈信仰の受容に繋がったと論じている。
- 31) 李昊栄前掲論文。
- 32) 李晶淑「高句麗・百済との戦争と王権専制化」前掲博士論文によれば、真平王の在位年間に計14回の戦争があったが、対隋・唐を対象にした外交活動は20回行われ、その中で戦争関連は4回にのぼったとされる。
- 33) 領客典については、浜田耕策「新羅聖徳王時代の政治と外交—通文博士と倭典をめぐる—」(『新羅

- の迎賓機構—関門と領客府—」（『新羅国史の研究』吉川弘文館，2001），金瑛河前掲論文，徐甫京「7世紀後半～8世紀前半の新羅と日本の関係—倭典の別置問題を中心に—」（『日本研究』32，2007），朴南守「8世紀新羅の東アジア外交と迎賓体系」（『韓国古代の東アジア交易史』周留城出版社，2011）に詳しい説明がある。しかしながら，領客典には不明な点が多いのも事実である。例えば職官志には，真平王43年に倭典を領客典に改編したとするが，新羅本紀の該当年条にはそのような記録がみられない。さらに，新羅本紀では真平王13年条に領客典令二員を置いたとするが，職官志には真徳王5年（651）に領客典の長官である令2人を置いたとしている。
- 34) 『三国史記』によると，入隋（陳）して求法活動を行っていた曇育（真平王27年条）・円光（真平王22年条）・智明（真平王24年9月条）などがこの時期に帰国している。円光は本文で述べる通りだが，智明についても「王尊敬明公戒行為大徳」とあり注目される（新川登亀男前掲書1994）。
- 35) 権恵永「三国時代・新羅求法僧の活動と役割」（『清溪史学』4，1987）。
- 36) 円光については，李基白「円光とその思想」（『新羅思想史研究』一潮閣，1986），辛鍾遠「円光と真平王代の国家と高僧」（『新羅初期仏教史研究』民族社，1992），権恵永前掲論文，新川登亀男前掲書1994など多くの研究がある。
- 37) 『三国史記』真平王43年秋7月条。また，『旧唐書』新羅伝には「自此朝貢不絶」とあることから，以後続けて朝貢が行われたことがわかる。
- 38) 李晶淑「内省の設置」前掲博士論文，李京燮「新羅上代の粟主と内省—国家と王室の財政構造変遷を中心に—」（『韓国古代史研究』22，2001）。
- 39) 李晶淑「真平王末期の政局と善徳王の即位」前掲書は，善徳女王が王位継承者に内定した621年は，新羅王権をとりまく外交関係において重要な画期になったと指摘する。ところで李晶淑氏は，善徳王の即位理由を倭の女王の影響と関連付けて論じている。ただし，これを物語る史料の根拠は現在のところ見当たらない。
- 40) 近年の研究では，鄭炳三前掲論文，浅井和春「飛鳥・奈良の仏教美術と律令国家」（『日本の時代史4—律令国家と天平文化—』吉川弘文館，2002），林南壽『広隆寺史の研究』（中央公論美術出版社，2003）で，比較的多く真平王代の新羅と倭の仏教交流史が言及されている。しかしながら，新羅の立場から検討した論著は皆無に近い。
- 41) 当該期の秦寺の創建事情と立地場所については諸説提示されてきたが，現広隆寺境内地の発掘調査の成果にしたがえば，『日本書紀』推古30年（622）秋7月条に関連して現在の広隆寺地に創建されたとみて相違なかろう（林南壽「蜂岡寺の創建」「秦寺の創建」前掲書）。また既往の研究では，承和3年（836）成立の『広隆寺縁起』に移転記録がみられ，『日本書紀』推古11年（603）11月己亥朔条には秦河勝が厩戸皇子から仏像を受けて安置する場所として蜂岡寺を造ったことが記されているため，蜂岡寺と秦寺の関係が論議されてきた。詳細は触れないが最近の林南壽氏の研究によれば，『広隆寺縁起』などにみえる移転とは，現在の北野廃寺跡に所在した蜂岡寺が秦寺に移転し両寺が合併して成立したことであるといえる。
- 42) 秦寺にこの仏像が施入された理由として，既往の研究では概ね次のように説明する。仏像は，この前の621年（推古29）春2月に亡くなった厩戸皇子（聖徳太子）を追悼するために新羅系渡来氏族である秦氏に送られたもので，新羅—聖徳太子—秦寺（広隆寺）という三位一体の関係を想定することができるとし（田村圓澄前掲書1983，平野邦雄前掲論文），また四天王寺に施入された仏具についても同様な視点から解釈できるとされる。なかでも田村圓澄前掲論文2002は，厩戸皇子と真平王の間の個人的な関係による点を強調している。しかしながら，新羅はそのような個人的な関係から倭に仏像・仏具を送ったとは考えられない。仏教を介した行為が真平王代後期の外交形態の一つであるとするれば，上記のような見解は新羅側の事情を無視しているといえる。
- 43) 田村圓澄前掲書1980。また，金理那「古代日韓美術交渉史」（『韓国古代史研究』27，2002）は，広隆寺の仏像に関わる近年までの研究史を整理している。
- 44) 林南壽「蜂岡寺と秦寺の本尊」前掲書。
- 45) 田村圓澄前掲書1983。
- 46) ところで，倭国内の新羅弥勒菩薩像に対比して注目されるのが，『日本書紀』敏達13年（584）の記録である。ここには，百濟から帰国した鹿深臣が弥勒石像一体をもたらしたと記録する。このことか

ら倭では、すでに584年の段階で、百済の弥勒像を受け入れたことがわかる（日野昭「敏達紀の弥勒石像とその周辺」『東アジアと日本宗教・文学編田村圓澄先生古希記念論文集』吉川弘文館、1987）。倭国内での初期弥勒信仰については、日野昭前掲論文に詳しい。したがって、真平王代後期に入り、百済ではなく新羅が弥勒菩薩像を倭に送った事情並びに、倭が新たに新羅のそれを受け入れた理由が注目される。

- 47) 田村圓澄前掲書1983, 金英美「新羅中古期の仏教と阿弥陀信仰の受容」(『新羅仏教思想史研究』民族社, 1994), 金徳原「新羅真興王代における王権強化と弥勒信仰」(『史学研究』76, 2004)などを参照。
- 48) 李基白「新羅初期仏教と貴族勢力」前掲書。
- 49) また、このような様相は百済でも同様であったことが指摘されている(金寿泰「百済威徳王代における扶余陵山里寺院の創建」『百済文化』27, 1998)。
- 50) 李基白「新羅初期仏教と貴族勢力」, 姜友邦「韓国の舎利莊蔽とその特徴」(『韓国仏教の舎利莊蔽』教養韓国文化社, 1993)。なお古代の仏教では、仏舎利に対する関心が最も高かったため、寺院建設の段階でそれが安置される塔が寺院の主体の地位を持ち、感覚的側面としての役割も期待されていたとされる(本郷真紹「古代寺院の機能」『日本国家の史的特質』思文閣出版, 1997)。ところで、倭国内にみられる舎利信仰は、中国(隋・唐)から伝わった信仰とする説明もあるが(浅井和春前掲論文)、本文で論じるように新羅と百済の影響を受けた可能性が高いと思われる。
- 51) 李基白「新羅初期仏教と貴族勢力」を参照。
- 52) 本文表2を参照。『日本書紀』によると、敏達13年(584)に仏舎利に関連した逸話が存在する。したがって、倭にはそれ以前から仏舎利が存在したといえる。
- 53) 『三国史記』真興王37年(576)春条。
- 54) 李基白「新羅初期仏教と貴族勢力」, 金杜珍「新羅真平王代の釈迦仏信仰」(『韓国学論叢』10, 1988), 李晶淑「銅輪系血縁意識の高揚と天賜玉帯」前掲博士論文など。真平王代の釈迦仏信仰は、真興王35年(574)に皇龍寺釈迦仏を造成した後、王自身を釈迦仏に比喩した真興王を受け継いだものと考えられている。さらに金杜珍前掲論文は、真平王代に釈迦仏信仰から釈宗意識も形成されたと指摘する。
- 55) 新羅の百座講会は、真興王が惠亮法師を僧統に任命して以後盛んに行なわれている(李基白「三国時代の仏教受容とその社会的意義」前掲書)。
- 56) 『三国史記』真平王35年(613)秋7月条。また『三国史記』善徳王5年(636)3月条には、636年に善徳王が病気になる際にも、皇龍寺で百高座を設け仁王経を講読したとある。詳細は、李基白「三国時代の仏教受容とその社会的意義」, 李晶淑「王権強化と仏教」を参照。
- 57) 李基白「円光とその思想」, 辛鍾遠前掲論文。
- 58) 王患高句麗侵封場, 欲請隋兵以征高句麗, 命円光修乞師表。光曰。求自存而滅他, 非沙門之行也。貧道在大王之土地, 食大王之水草。敢不惟命是從。乃述以聞。二月, 高句麗侵北境, 虜獲八千人。四月, 高句麗拔牛鳴山城(『三国史記』真平王30年(608)条)。また、『統高僧伝』第13巻及び『三国遺事』義解第5円光西学にも同様の記録がみられる。
- 59) 岡本東三「太子の寺々―法隆寺と四天王寺―」(『古代を考える古代寺院』吉川弘文館, 1999)。
- 60) 四天王寺の創建とその後の展開については、川岸宏教「四天王寺の創立と発展」(『古代寺院と仏教』名著出版, 1989)を参照。ただし川岸宏教前掲論文では、本稿の見解と異なり『日本書紀』の記録にしたがい、588年の厩戸皇子・蘇我氏と物部氏の争い後である推古元年(593)に創建された可能性が高いとされる。
- 61) 田村圓澄前掲書1983, 加藤謙吉「四天王寺と難波吉士」(『日本書紀の謎と聖徳太子』平凡社, 2011)。なお田村氏は、それ以前は難波吉士の氏寺であったと論じる。また加藤氏も、難波吉士は加耶系渡来人とみなすため、四天王寺と厩戸皇子・新羅の直接的関係は否定するが、難波吉士氏の関連寺院であったことは確かとされる。
- 62) 『聖徳太子補闕記』には、秦河勝も四天王寺と関わり深い人物と記録する。ところで『日本書紀』によると、秦河勝は、610(推古18)年7月に新羅使節が来倭したときその導者に任命されている。秦河勝は、新羅とも深いパイプを有し、倭王権の外交接待を掌る機関の重要人物であったことが窺い知

- られる（平野邦雄前掲論文，井上満郎『秦河勝（人物叢書）』吉川弘文館，2011）。とすれば，新羅使節が貢納した仏像・仏具が同時期に秦寺と四天王寺に施入されたのには，秦河勝の仲介をはじめとした何らかの関連性が推察される。
- 63) 古代の難波と難波津については，直木孝次郎『難波宮と難波津の研究』（吉川弘文館，1994），仁藤敦史「外交拠点としての難波と筑紫」（『国立歴史民俗博物館研究報告』200，2016）などを参照。
- 64) 森公章「古代難波における外交儀禮とその変遷」（『古代日本の対外認識と交通』吉川弘文館，1998）は，難波での外交儀禮の変遷を詳細に論じる。
- 65) 難波と飛鳥での様相は，『日本書紀』推古16年（608）にみえる隋使裴世清の来倭記事を通してその一面が垣間見られる（直木孝次郎前掲書）。
- 66) それゆえ四天王寺は，一氏族の氏寺にとどまらず，政治色の強い機能を多数有していたと思われる。その役割は，宗教的機能と難波津の経済的機能の関係を合わせて検討する必要がある。
- 67) 新川登亀男「日羅間の調」前掲書1999。
- 68) 田村圓澄「新羅送使考」（『朝鮮学報』90，1975）。田村氏は近年の「大唐学問僧の帰国と蘇我氏の滅亡」にいたるまで，当時の新羅の対倭外交を送迎外交・中継外交と規定する。また田村氏は，上のその後の論稿にて，新羅と倭の間で送迎外交が展開された背景に蘇我氏の滅亡を指摘している。いずれにしてもこれらの研究成果は，倭の立場からのみ検討されたもので，実際に外交を行なった新羅側の事情が考慮されていない。
- 69) 鈴木英夫「七世紀中葉における新羅の対倭外交」，新川登亀男前掲書1994。またこのような見解は，近年の延敏洙前掲論文2002にいたるまで，日韓の研究者の間でほとんど変わることなく継承されている。
- 70) 『日本書紀』推古16年（608）6月条。
- 71) 百濟武王（在位600～641）は，唐の建国以来，新羅の真平王以上に対唐外交を活発に展開していた。既往の研究によれば，唐建国後20年間に実施された対唐外交は，新羅が14回であるのに比して，百濟は15回に達していたとされる（金寿泰「百濟滅亡と唐」『百濟研究』22，1991）。また，百濟が対唐外交をいかに重視していたかは，百濟が唐に送った物品や外交担当者を通して窺い知られる。例えば，武王27年（626）に唐に明光鎧を送ったり，同王28年（627）には武王の甥である福信を派遣している。
- 72) 金鉉球「大化改新と日・羅・唐の三国連合体制の成立」前掲書，朱甫暎前掲論文1993，中村修也『白村江の真実 新羅王・金春秋の策略』（吉川弘文館，2010）。
- 73) 鬼頭清明前掲論文，鈴木英夫「七世紀中葉における新羅の対倭外交」，新川登亀男前掲論文1999。
- 74) この条文についての詳細な説明は，新川登亀男前掲書1994を参照。日本の僧綱制の起源については，曾根正人「日本仏教の黎明」（『日本の時代史3—倭国から日本へ—』吉川弘文館，2002）なども参照。
- 75) 『日本書紀』推古32年（624）4月戊申条，推古33年（625）春正月戊寅条（実際の年は前者が推古31，後者は推古32である）。
- 76) また，慶州南山に散在する仏像の製作年代も概ね7世紀初と理解されている（文明大「慶州南山仏蹟の変遷と仏谷龕室仏像考」『新羅文化』10・11，1995）。
- 77) 朱甫暎「南山新城の築造と南山新城碑第9碑」（『金石文と新羅史』知識産業社，2002）。
- 78) 金杜珍前掲論文，李晶淑「銅輪系血縁意識の高揚と天賜玉帯」，朱甫暎前掲論文2002など。
- 79) 円光の世俗五戒については，辛鍾遠前掲論文を参照。
- 80) ただし倭国内では，百濟僧觀勒及び高句麗僧惠灌の活動を通してわかるように，百濟・高句麗僧の影響力は相変わらず強かったものと思われる。
- 81) 最新の成果として，古市晃「大化期の王権構造」（『歴史評論』821，2018）は，630～40年代（舒明・皇極期）の倭国の国際関係への対応について，新羅など朝鮮史の立場からの分析はほとんどないが，倭国内の統治体制の進展と絡めて論じている。また，既往の研究成果も多い640年代の倭国の対朝鮮問題については，河内春人「大化改新の対外関係」（『歴史評論』821，2018）などが公表されている。投稿直後に接したため検討できなかったが，今後の課題としたい。

Silla's diplomatic relations with Wae during the later period of King Jin-pei

—In relation to the foreign policy of Silla's King Jin-pei—

Koichi KONDO

Abstract

Until the later period of his position, Silla's king, Jin-pei, took little diplomatic action toward Wae. But in 610, there was a big change in his attitude. After this change, King Jin-pei dispatched his messengers to Wae in rapid succession, and promoted vigorous diplomatic activities with the country. Especially, in 622, at his age of 44, the king's ambassadors presented Buddha statues, Buddha's Sarira, and flagpoles to Wae, and sent Wae's student in the Tang. This paper examined Silla's diplomatic relations with Wae developed in the latter part of the Jin-pei dynasty recorded in "Nihon Shoki" from the viewpoint of Silla's history.

Silla's diplomatic relations with Wae during the later time of King Jin-pei did not start with a subordinate attitude with which, as pointed out in the past, its diplomacy tried to withdraw Wae's support in the confrontation with Baekje and Koguryo. It was carried out under the aggressive foreign policy based on the confidence that Silla achieved the advance of the diplomacy for China and the government system at the reign of Silla dynasty. King Jin-pei sent Buddhist things to Wae and tried to convey Silla's thought and institution to Wae while building a relationship with Wae's student in the Tang. It is inferred that he searched for the so-called "Sillanization" (integration into the Silla dynasty) through those activities.

Keywords: King Jin-pei, diplomatic relations with Wae, Nihon Shoki, Buddhist things, Wae's student in the Tang